

## 松阪の知の系譜

本居宣長  
小津久足  
小津安二郎

(30)

フランス文学者

柏木 隆雄

本居春庭の眼疾のいきさつ  
は、足立著「やちまた」上巻第  
3章に「春庭が目を病みはじめ  
たのは寛政3年（1791）29  
歳の春」ろからであろうか。か  
ら始まって、その治療に宣長が  
奔走憂慮する様が詳しく述べ  
られている。

連載第26回で述べたように、  
春庭は天明6年（1786）3  
月、24歳の時に宣長の弟子の一  
人と吉野行を試み、満開の桜を  
満喫した後、奈良、京都、大阪、伏  
見を巡ってほぼ1カ月の旅を終  
え、4年後の寛政2年11月、父宣  
長や数人の弟子たちと京都に上  
り、2週間ほど滞在する。眼疾に  
襲われるのはその翌年だから、  
この数年は春庭にとって最も充  
実した青春ではなかつたか。  
目が痛むとか、見えにくいと  
か、かすむとかの症状がすでに  
数ヶ月前から出て、ようやく耐  
え難くなつたのか、寛政3年8  
月、津の葉種問屋小西家の養子  
となつた弟春村に付き添われ  
て、当時眼病治療で有名だつた  
尾張馬島明眼院で施療を受ける

## 春庭の眼疾のいきさつ

ことになつた。

さてどんな治療を受けたか。  
服薬、こう薬、はり治療の類が考  
えられるが、1カ月後の春庭宛  
ての宣長の書簡で、「腫（は）レ  
痛みもうすらぎ、次第に快（こ  
ころよき）候由」と付けてやつ  
ていた与七が戻つての話を喜ん  
だものの、春庭から寄せられた  
手紙を読めば、今もなお充血し  
て、「目も開き申さず候由、さぞ  
難儀の段察し入り候」と心配し

り、2週間ほど滞在する。眼疾に  
襲われるのはその翌年だから、  
この数年は春庭にとって最も充  
実した青春ではなかつたか。  
目が痛むとか、見えにくいと  
か、かすむとかの症状がすでに  
数ヶ月前から出て、ようやく耐  
え難くなつたのか、寛政3年8  
月、津の葉種問屋小西家の養子  
となつた弟春村に付き添われ  
て、当時眼病治療で有名だつた  
尾張馬島明眼院で施療を受ける

「やちまた」の主人公の「私」  
は春庭の病名を特定しようと、  
伊勢市内の若い眼科医に「宣長  
の療養を選ぶ。

11月の初旬松阪に戻り、自宅で  
「やちまた」の主人公の「私」  
は春庭の病名を特定しようと、  
伊勢市内の若い眼科医に「宣長  
の療養を選ぶ。

## 京都ではり医修業 松阪に戻って結婚業

翌年3月、宣長が名古屋の門  
人たちに講義を行ふ旅に同道し  
た春庭は、再び明眼院の施療を  
受けるが癒えることなく1カ月  
後には帰宅する。さらに次の年

父と共に京

都に上り、著名な眼科  
医の診察を受けるもの  
の効き目な

も入っているだろう。一般には  
細字での筆写が原因の一つと考  
えられているようだが、病名は  
特定されていない。

明が確定、その4月失明した者  
が当時身を立てるにつきとした  
はり医の修業のために再び京に  
滞在、はり医猪川元貞に付いた  
のは10月のことだった。

京都滞在1年余りの8月始  
め、老い先の短さを訴える父宣  
長の乞いに負け、迎えの弟春村  
と共に松阪に帰つた春庭に縁談  
が調えられ、宣長の弟で母方の  
家を継いだ村田親次の三女壱岐  
がその年の暮れの26日、嫁とし  
て本居家に入つた。春庭35歳、壱  
岐は19歳年下の16歳。はり医と  
して診療したこともあるようだ  
が、本領はやはり本居学の継承  
だと深く自覺していたに違いない  
。彼にはつらい日々だつたろ  
う。

が、本領はやはり本居学の継承  
だと深く自覺していたに違ない  
。彼にはつらい日々だつたろ  
う。

（毎週土曜掲載）



明眼院全景  
(尾張名所  
図会)より

【柏木隆雄さん(刀)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪  
市殿町生まれ。大阪大学、大手  
前大学名著教授。著書に「バ  
ルザック詳説」「翻訳にバルザ  
ック著「暗黒事件」など。



フランス文学者 柏木 隆雄

ろう。

同じ年2月3日は、やはり天候についての記述の後、「未(ひつじ)の刻半(午後2時ごろ)津より使い来たり、今日(みの刻)出生、母子つつがなき由(原漢文を読みやすく書き改めた)と記している。

翌日には津に使いを出して餅を送り、9日の朝早く、お七夜の文を読みやすく書き改めた)と記している。

前(午前10時ごろ)勝安産、男子(1767)正月14日。「晴天夜亥(い)の刻半(午後10時ごろ)勝安産。男子出生。」などが、22日(1767)正月14日。「晴天夜亥(い)の刻半(午後10時ごろ)勝安産。男子出生。」などと名付く」と記す。

明和7年(1770)1月12日「申刻(午後3時)勝安産、女子出生」とあり、18日「七夜也小兒名女飛驒」と書くのみ。当時

書く。

次男春村の出生は明和4年(1767)正月14日。「晴天夜亥(い)の刻半(午後10時ごろ)勝安産。男子出生。」などと名付く」と記す。

書く。

手に取らずにいた。これも読んでいなかつた。元を後から悔やむことになる例だ。

いつどろの作か、なかなか判じ難い。

春庭の著作は本居宣長と和歌山本居家の後裔(こうえい)本居宣長(よかい)との共編「増補本居宣長全集」の第11巻「本居春庭・本居宣長全集」(1927年)に収められているが、とにかく書作として示されている物を刊本として出すことに意義がある、といった編さんの方で、

書く。

### 春庭の詠草の時期 資料少なく判じ難し

足立巻一「やちまた」下巻の春庭の年譜によれば、彼は8歳で手習いを始め、13歳から父に命じられて賀茂真淵の「にひまなび」などを筆写。以後年ごとに写した書籍が挙げられている。

歌は20歳の時に2首作つたとあるが、果たしてどのようなものか。宣長は自宅でも歌会を催していたから、さらに春庭も和歌は20歳の時に2首作つたところもある。しかし今どきの乏しい者は誠に取り付く島ひたすら活字が並べられて、注

書く。

## 春庭の誕生、日記に詳しく

酒、饅節(かつおぶし)、産着などを携え、初めて津の妻の実家草深家を訪れて「小児健蔵と名付く。余が旧名也」とあり、午後6時の松坂歸着までやや詳細に

として初子で当然とはいえないが、長子春庭の珍重ぶりがよく分かる。

書く。

宝暦、明和といえば、松坂の商人で俳句、絵画をよくした森壱仙(1743-1828)の「宝暦はなし」が、当時の松坂の様子を書いていて、昭和48年(1973)郷土史家桜井祐吉氏の編で刊行された物を、確か昨年11月に「くなつた長兄が購入して吹聴していたように思うが、その頃はそうした本に関心が薄

いていないので、それぞれの歌が

多く手に取らずにいた。これも読んでいなかつた。元を後から悔やむことになる例だ。

書く。

漢文体の簡潔な記事に終始する宣長の70年にわたる日記は、多くの記述が宝暦13年(1763)、宣長34歳の正月4日は「晴天、風」、6日は「晴天」、7日は「晴天、風烈、時々雪散」とだけある。他の日もおおむね天候が記されるのみで終わる。さすがに元日は「晴陰、微風、晴雨、土(うぶすな)神社、山神祠(祠)」の次に、町々での失火があるが、幸い大火事にならずに済んだこと、「古今序」を読書始めとしたことが数行記されている。岸土神社の参詣は、おそらく妻勝子の初産を案じてのことだ



吉川弘文館版「本居宣長全集」第11巻(大手前大学図書館蔵)

とあるが、幸い大火事にならずに済んだこと、「古今序」を読書始めとしたことが数行記されている。岸土神社の参詣は、おそらく妻勝子の初産を案じてのことだ

春庭の著作は本居宣長と和歌山本居家の後裔(こうえい)本居宣長(よかい)との共編「増補本居宣長全集」の第11巻「本居春庭・本居宣長全集」(1927年)に収められているが、とにかく書作として示されている物を刊本として出すことに意義がある、といった編さんの方で、

手に取らずにいた。これも読んでいなかつた。元を後から悔やむことになる例だ。

書く。

**【柏木隆雄さん(刀)略歴】**  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

いつどろの作か、なかなか判じ難い。

書く。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(28) フランス文学者

柏木 隆雄

足立巻一（1913—85年）著「やちまた」を読んだ感動は忘れない。昭和49年（1974）に河出書房新社の初版が出て、この時私は30歳。学生寮の暗い蛍光灯の下で一気に読んだとばかり思い込んでいたが、この稿を書くために中公文庫版（2015年）を開くと、どんだけ思ひ違いであることが分かった。

この本が出る前年に私は結婚しており、2年後神戸女学院大学にフランス語教員として初めて職を得た年に、「やちまた」は芸術選奨文部大臣賞を得てい



足立巻一

る。人からその評判を聞いて読んだのが本当のようだ。

足立が昭和9年（1934）から伊勢倉田山の神宮皇學館での4年間、友人たちとの濃密な交友を活写した文章に、私自身の学生寮での体験を重ね合わせて、つい学生時代の読書と錯覚していたに違いない。

「やちまた」は、神宮皇學館本科の学生として勉強に励む「私が、ある日の講義で文法の教授が黒板に「本居宣長」詞（このとほ）の「ハ衛（やちまた）」詞の通路（かよいじ）」と書いた文字に興味を引かれ、春庭の事績を説いた後で教授が「不思議ですねえ：語学者には春庭のようないい人や、世間から偏屈と言われる人が多いようですねえ」とばかり思ひ込んでいたが、この本が出る前年に私は結婚しており、2年後神戸女学院大学にフランス語教員として初めて職を得た年に、「やちまた」は芸術選奨文部大臣賞を得てい

つて、「盲目の語学者」春庭が「私の心に深く祟くつてしまふところから始まる。

「学術書というより面白い『小説』のよう

春庭の人生と學問的著述についての徹底的な追跡と「私」を取り巻く事象の叙述が、二つながらに重なり、もつれ合うこの

## 春庭の評伝 「やちまた」

本は、ようやく腰を落ちさせて文学研究に取り組もうとする私に強く響いて、興奮しつつ読み進めた。

私が高校生の頃、長姉一家が伊勢市内に住んでいて、よく泊まり掛けで遊びに行つた。懐かしい伊勢の町名が「私」と友人たちとの共同生活の中で取り上げられて懐かしく思つたり、「心の中の松阪」で書いた殿町中学

校の国語の先生ジャリさんが、神宮皇學館の出身だったことを見出しつて、ジャリさんはこの「私」とほぼ同期で学んだのではなかっただ想像したりして、筆者の足立に手紙を出そうとさき思つたりした。つまり学術書というよりは、まさしく「小説」にして面白く読んだのだ。

若い時に読まずにいた本を、年を経て読むことも大事だが、かされた。

また少年時代よく通つた松阪城跡の市立図書館の奥にひつそりと併設された鈴屋遺跡保存会でお見掛けした山田勘藏氏の篤実な姿が、その本に如実に描き出されているのも懐かしい。

私が連載のタイトルに春庭の名を挙げなかつたのは、すでに春庭については「やちまた」に尽きていると考えたからだ。

大方はその本に委ね、その記述に依拠しながら、多少付録的に書くことにしたい。

その頃感動した本を、改めて重読、三讀するはまた極めて毎回「やちまた」を読み返して、その名著たることを確認するところが多い。なんでこんな下らぬ本に感動したのか、どう

う場合もあるうが、著者の「吉意」や、著書の「読みどころ」を外していたことに初めて気が付いたりする。

今回「やちまた」を読み返して、その名著たることを確認するとともに、最初の読書では田

【柏木隆雄さん】(7) 春庭  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など。

(毎週土曜掲載)

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

(27)

フランス文学者

柏木 隆雄

宣長は33歳で22歳の妻勝子を迎えて翌年2月春庭が生まれる。この年5月に賣茂真淵と松阪で初めて対面しているから、長子春庭の誕生は、宣長にとって意義深い年として刻まれたに違いない。

子供の誕生は、折しも彼の学問がいよいよ本格的に実を結ぼうとしている時で、大いに彼を力づけもした

自ら春庭と号したほど、宣長が春という季節をめでたのはよく知られているが、子供たちを全て新春に得ているのは、もちろん偶然にもせよ、宣長の律義

さ、といふか何か計画的な意図さえ感じるほどだ。

男には春の名、娘には全て古來の地名を与えていたのも、彼のこだわりの強い一面を表すものかもしれない。飛騨、美濃、能登は、宣長が17歳で作成した「日本天下四海地図」の名残だろうか。彼の弟で母方の村田家を継いだ親次の3人の娘のうち次女「三女」に佐渡、喜岐（後に春庭の妻となる）と地名を付けたのも宣長に違いない。

子供が上がって来て勉強の邪魔をしないように、書齋に登りた記憶がある。春庭も父の指示する古典を筆記しながら、文字を通して多くの知識を記憶していくことだ

春庭も父の指示する古典を筆記しながら、文字を通して多くの知識を記憶していくことだ

## 宣長の子、皆新春生まれ

切りど、上部の階段を外したと見渡した時、狭い部屋だと子供心に思つた。今は特別の日をのぞいて立ち入ることはできないだろうから、貴重な経験をしたことになる。

父の講義にももちろん参加して耳を澄ましたに違いない。春庭は弟妹たちと同じく、あるいは彼ら以上に父を尊崇すること

あつかった。

宣長幼時の習慣に倣つて、春庭は13歳の頃から古典籍の筆写に携わつたという。現代の読書はほとんど全て印刷物で、文庫

春庭筆「古事記伝」版木（本居宣長記念館寄託  
（片野家蔵））

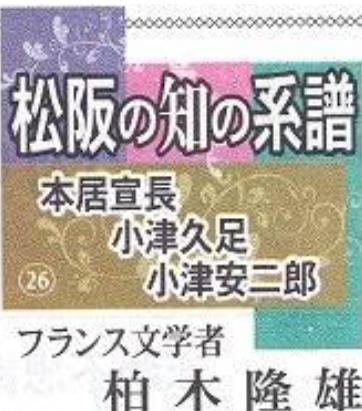
## 大半は春庭が書写本

當時、書籍の刊行は木版による。清書原稿をさらに筆記者が薄い和紙に筆で書写し、それを刷版木に貼り付け、彫り師が文字を残して削つて墨を付けて刷

【柏木隆雄さん（？）】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ラルザック詳説」「翻訳にパ・ラルザック著「暗黒事件」など。

春庭は29歳で目の病を発して32歳で失明に至る。老境に入ろうとする宣長の嘆きは深かつたに違いないが、いよいよ壮年に達して学海に羽ばたかんとする春庭自身にとつて、悔やんでも悔やみきれぬ絶望的なものであつたろう。（毎週土曜掲載）

る。版木に貼る紙を版下というが、父宣長の主著「古事記伝」全44巻の版下は、春庭が17巻、春庭失明の後は、宣長が6巻、次女の美濃が5巻、弟子の丹羽局（つむ）が10巻、植松有信が5巻、栗田土満（ひじまろ）が1巻を書いた。この版下書きは努力、眼力、さらには根気の要るもので、春庭の眼病の一因とも言われている。



本居宣長  
小津久足 小津安二郎

フランス文学者

柏木 隆雄

宣長「菅笠日記」の下巻は、明和9(1772)年3月10日に吉野をたつて、往路の「桜の渡し」とは別の道で西に向い、「柳の渡し」を越えて土田から北に進み、東坂寺、川原寺、岡寺など古事記、万葉の故地を巡って、古文研究の成績を確認しつつ松阪帰着に至る紀行となる。

今も奈良朝文化を慕う人々が多く散策する三輪神社、藤原宮跡、山辺の道と、土地の古老に地名の由来や逸話を尋ね、典拠に照らし合わせて、時に疑い、時にうなづきながら筆にしていく。萩原からはまた往路と別の道



「菅笠日記」下巻の1ページ目（本居宣長記念館蔵）

宣長「菅笠日記」の下巻は、明和9(1772)年3月10日に吉野をたつて、往路の「桜の渡し」とは別の道で西に向い、「柳の渡し」を越えて土田から北に進み、東坂寺、川原寺、岡寺など古事記、万葉の故地を巡って、古文研究の成績を確認しつつ松阪帰着に至る紀行となる。

取り、雨降る中をかこで赤羽越えから石名原に出て、多氣の里で旧主北畠家の古文書に祖先の名を見いだして感慨にふける。そして目に懐かしい壇坂の峠を陥しくたどり、ようやく3月14日伊勢寺を経て松阪に近づけば、「迎えの人々など来あつる。うちつれて暮れはてぬる程にぞ。帰りつゝ。」

宣長が「よしや匂いのとまらずとも。後しのばん形見にも。その名をだに。せめて書きとどめ。菅笠の日記」と筆を置くまでを読み来つた私たちも、なかほつとする気持ちになる。

下巻も上巻と同様、興そそる記述が多いが、連載の冗長になるのを恐れて詳述は控えよう。

「菅笠日記」に関する心を持たれた方は、本居宣長記念館のホームページ上で、ぜひ味読をお勧めしたい。

吉野旅行の後、本居宣長は寛政元(1789)年、60歳の春、名古屋に長勇春庭と門弟福掛大

息子春庭の病を記す

平(のちに宣長の養嗣子となる)を同伴して20日ほど旅し、翌年はさらに門弟数人を加えて上洛。文事にたしなみの深い光格天皇の新皇居を見学するなど、1カ月足らず滞在する。さらに同年8月、にわかに目を病んだ春庭の治療のため尾張馬鳴の明眼院へ付き添つた。翌年の名古屋行きも春庭の治療

の外に名古屋の門弟の獲得のことがあり、同年の上洛は40日にわたる長いものとなる。この時も春庭を同伴しているが、それは京都で彼を針医として修業させたためでもあった。

宣長は、他に例がないほど、70年の長きにわたって日記を残しているが、若い時の「在京日記」と「菅笠日記」を除いて、ほぼ簡略な筆で要件を書き付けたものばかりで、同年の在京の記録は、一種の「歌日記」のように京都

ばかりで、同年の在京の記録は、略な筆で要件を書き付けたものばかりで、同年の在京の記録は、一種の「歌日記」のように京都ばかりで、同年の在京の記録は、略な筆で要件を書き付けたものばかりで、同年の在京の記録は、

の文人たちとの歌の応答の記事に満ちている。宣長が学者としての才能を見抜き、将来自分の後継者と嘱望した長勇春庭の失明の危機にあるのを知つて、彼はどれほど驚いたことか。その実政3年の日記は、それをどう記しているだろう。事の起つた8月10日の記事に「健亭(春庭の号)眼病によつて、治療の為(ため)尾張馬鳴に行く。今日発足」とだけあり、14日「飛驒(宣長長女)婚家の津に帰る。2月から逗留(じゅりゅう)して、今日帰る所なり」といすれも漢文で記して、伊勢の地に雨が降り続き、大風も出て町中瓦が多く落ち、大木も倒れたことを、漢文数行を費やして記録する。

3項目ともに宣長の心を大きく悩ませる事件である。この記述の冷静さはただものでない。

北伊勢や尾張辺りが最も災害が多いと細かに記す筆に、長男、長女に降り掛かる災いの兆しへの懸念を封じ込めようとしたのだろつか。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大阪手

前大学名誉教授。著書に「ルザック詳説」、「翻訳にパルサバ著『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(25)

フランス文学者

柏木 隆雄

花かりの水分（みくまり）  
神社の参拝を終えた宣長一行  
は、3月9日朝立ちして、西行の  
庵跡を過ぎ、和紙の里国宿（く  
ず）では紙書きの珍しい技に「発  
（たつことも忘れ）て見入る。  
さらに吉野川に沿った里を進  
むと天瀧村の名の通り、大きな  
岩が重なる中を激しく落ちる滝  
つ瀧、そこを4人乗りの筏（い  
かだ）が下る様をまるで絵のよ  
うな、と感嘆。里人が「岩飛び」  
と称して、滝の落ちる流れを隔  
てる川面から高さ8尺もある岩  
の間を飛んでみせたり、淵に沈  
んで浮いてくると聞いて、好

奇の耳をそばだてた。  
好奇心は宮瀧の柴橋を渡つた  
後、屏風（びょうぶ）のように並  
んだ岩場に現れた男によって満  
たされる。その男は、

まづ着物を皆脱ぎて、はだかに  
成て、手をば垂れて、ひしと腋

（わき）につけて、目をふたき、躊  
躇立たるままにて、水の中  
につぶりと飛びに入る様。珍しき  
ものから、いと怖ろしくて、まず  
見る人の心ぞ、消え入ぬべき。こ  
のころは水高ければ深さも二  
丈五尺（8尺弱）ばかり有りと

なん。しばし有りて、やや下へ浮  
かびいでて、岸の岩に取り掛か  
りて、あがりきて、苦し氣なるけ  
しきもなく、なお飛びてんやと  
いえど、恐ろしさに又は飛ばせ  
で（2度目は飛ばさせずに）や  
みぬ。

手に汗握つて見物する様子や  
真つ逆さまに落ちてみせるとい

き込んだことがある。その時配  
られた江戸時代の観光案内のコ  
ピーに、岩から飛び込む男たち  
の絵と文章があり、宣長もこの  
図を見たのだろうかと思つたり  
した。

一行は川辺を離れて帰途に就  
き、万葉集にある象（きき）の小  
川、桜も盛りの象山も見る。いよいよ吉野を去るに当たつて、

う男の言葉を写す宣長の筆から  
その驚きが見て取れる。さらに  
滝の名称の説議も忘れず、生き  
生きとした叙述も怠らぬ彼の紀  
行文の醍醐味（だいごみ）が味  
わえる。

## 宮瀧の荒業の様を活写

ながれての世には絶えけるみよ  
し野の滝のみやこに残る滝津  
瀬

と一首「辛うじてひねり出」し  
て「菅原日記」の上巻を閉じる。

天武天皇の「よき人のよし  
のよく見てよし」と言いし吉

の萬葉歌（巻1-27）を引くこ

江戸期の観光案内に  
川に飛び込む男の絵

数年前、奈良日仏協会の皆さ  
んの案内で私も宮瀧を訪れ、こ  
の岩場に立つて、青い淵をのぞ



現在の宮瀧（筆者撮影）

【柏木隆雄さん（77）略歴】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ブルザック詳説」、「翻訳にパルザック著『暗黒事件』など」。

316）をほうふつとさせる文  
章で上巻を締めくくる。  
雅俗みごとに取り混ぜた美に  
鮮やかな構成と言ふほかない。  
(毎週土曜掲載)

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

(24)

フランス文学者

柏木 隆雄

水分(みくまり)神社の前に立った宣長は、亡父の誓言を果たす13歳での吉野詣でをこう振り返る。

思い出(いづ)るそのかみ垣(神のかみ)と普(ひら)という意味の「上(かみ)」を兼ねるにたむけして麻(ぬさ)よりしげく(麻糸のよりもさらに細くたくさん)散(るなみ)だかな。袖(そで)もしほりあえずなん。かの度(旅と度を兼ねる)は、むげにわかく(幼くしてまだ何事も覚えぬほどなりしが)。ようようひとなりて。物

水分(みくまり)神社の方角を眺み、参詣を思いながら果たせなかつた30年後に、やつと思ひを遂げた30年。宣長の感慨は、子供の時に流した細い、たくさん涙が凝つて、今や一つの涙となつて流れる。



水分神社鳥居（あいの会  
「『菅笠日記』写真集」から）

水分(みくまり)神社の前に立った宣長は、亡父の誓言を果たす13歳での吉野詣でをこう振り返る。

思い出(いづ)るそのかみ垣(神のかみ)と普(ひら)という意味の「上(かみ)」を兼ねるにたむけして麻(ぬさ)よりしげく(麻糸のよりもさらに細くたくさん)散(るなみ)だかな。袖(そで)もしほりあえずなん。かの度(旅と度を兼ねる)は、むげにわかく(幼くしてまだ何事も覚えぬほどなりしが)。ようようひとなりて。物

は。さりとも神もおぼしゆるし。受け引きたまうらん。猶(なお)たのもしくこそ。」と、心に期した神社詣でを見頃の吉野の花見の口実としたけれどしか

の心もわきまえ知るにつけて御めぐみの。おろかなうざらしことを思えば。心にかけて。こなたにむきてをがみつつ。又ふりかはへても(無理をしてでも)詣でまほしく。思いわたりしことなれど。何くれと紛れつつ過ぎこしに。三十年を経て。今年又四十三にて。かく詣でつるも。契りあさからず。年頃のほい(願い)かないつる心地して。いどうれしきにも。落ち添うなみだは一つ也(なり)。

高潮となる。まさに紀行文の高さな仕掛けが施されているのだ。宣長は、「そもそも花のたよりは。すこし心あさきようなれど。こと(異)事のついでならんより」となれど。何くれと紛れつつ過ぎこしに。三十年を経て。今年又四十三にて。かく詣でつるも。契りあさからず。年頃のほい(願い)かないつる心地して。いどうれしきにも。落ち添うなみだは一つ也(なり)。

宣長は「そもそも花のたよりは。すこし心あさきようなれど。こと(異)事のついでならんより」となれど。何くれと紛れつつ過ぎこしに。三十年を経て。今年又四十三にて。かく詣でつるも。契りあさからず。年頃のほい(願い)かないつる心地して。いどうれしきにも。落ち添うなみだは一つ也(なり)。

## 学者の自覚を生む旅

高潮となる。まさに紀行文の高さな仕掛けが施されているのだ。宣長は、「そもそも花のたよりは。すこし心あさきようなれど。こと(異)事のついでならんより」となれど。何くれと紛れつつ過ぎこしに。三十年を経て。今年又四十三にて。かく詣でつるも。契りあさからず。年頃のほい(願い)かないつる心地して。いどうれしきにも。落ち添うなみだは一つ也(なり)。

は。さりとも神もおぼしゆるし。受け引きたまうらん。猶(なお)たのもしくこそ。」と、心に期した神社詣でを見頃の吉野の花見の口実としたけれどしか

し他事のついでではなく、名にし負う吉野の旅、ということならば、神様も許してくれよべと種明かしをする。

先にも言うように、宣長の旅立ちは明和9(1772)年の

旧暦3月5日。生まれが享保15(1730)年5月7日だから、42の厄はなお彼の意識下にあつただろう。それはすなわち父の願掛けからの誕生から「諭語」にいう「15で学に志す」年に近い13歳での初詣。そして30年を経た「厄」を払つての新しい学者宣長の自覚を生む旅だったのだ。

「みくまり」なまつて御子守(みこもり)に

上の文章に続けて神社の由来を地勢や万葉の故事、「続日本紀などを引いて、水分と称され

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

宣長一行は、このあと尾張から旅人と付近の茶店で出会い。漢詩文を作つて得意なこの男が、自分たちのことを根掘り聞くのを、漢文一辺倒を排斥する宣長が、閉口しながらも歌のやり取りをしてみせるのも、あるいは水分神社の感激を失わないためだつたかも知れない。(毎週土曜掲載)

ていたのが、やがて変になまつて「御子守(みこもり)の神」となり、それが「子守の神」になつた、と宣長が推測するのは、まさしく商人を志した当時の少年が、今や古代学の知識と見識を備えた学者となつた証しが、われとともに確認させる響きがある。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安二郎

フランス文学者

柏木 隆雄

勇んで谷に降りて滝の煙、千股の山里にたどり着くと、春の日も暮れ、そこで「泊。名高い龍門の滝の見物は、桜に遅れてはと諦め、翌朝足取り軽く吉野に向かう。明和9(1772)年旧暦3月8日、松阪を出てちょうど4日目となる。

### ハツ当たり気味の宣長がほほ笑ましい

談山神社で折よく「いまをきかり」の桜を見て、その門から山路を登つて行くと、大和の一帯を見渡せる茶屋がある。そこから峰の頂上に至つて、

上市を過ぎて吉野川に至り、丹治から吉野の山口にたどり着いて、そこから桜の多い森の道を登り詰めるとまた茶店で、ここは「一日(ひとめ)千本」といって、一番桜が見えるそうなのだが、宣長はたちまち腹を立て

ここよりぞよしの山々。雲の上はるかにみやられて、あけくれ心にかかりし花の白雲。かつがつへようやくこみつけたる。いとうれし。



水分神社本殿（あいの会「菅笠日記」写真集）から

## ついに水分神社に到着

全くいい加減で、今年は例年よりも早く咲いたのだと、今頃に

くまり（神社で、彼の吉野説での目的の一つでもあった）

さるは（というのも）むかし我父なりける人。子をもたぬ事を、深くなげき給（たま）いて。はるばるとこの神にしも。ねぎこと（祈り）し給いける。しるし有りて。程もなく母なりし人。ただしげなる名を（そんな俗っぽい

と待ち望んでいた吉野山の桜を遠目に捉えて喜ぶ宣長に、読み来たつた私たちもほつとする。

名を付けんと。いと心つきなし（実際に食わない）。

「ひとめ」という称は、なるほど「俗っぽさ」を免れないが、単に呼称だけではなく、楽しみにしてきた「花は大かた盛り過ぎて、今は散り残りたる梢（こずえ）どもぞ。むらきえたる雪の單に呼称だけではなく、楽しみにしてきた「花は大かた盛り過ぎて、今は散り残りたる梢（こ

なつて聞かされたことからも怒りが来ているようで、ハツ当たり気味の宣長がかえつてほほ笑ましい。結局は里人たちにもどうてい定め難いことだと自らを

納得させ、まず「箱屋の何がし」に宿を予約しておくと、近くの吉水院（よしみすいん）、藏王堂（ざおうどう）に足を伸ばして後醍醐（ごだいご）、後村上（ごそくじょう）両帝の事績をしのんだ。

その堂より18町（約2キロ）ほど登った所に「子守の神」の社があり、これこそが吉野水分（みくまり）神社で、彼の吉野説での目的の一つでもあった。

そこで私が生まれることになる、と宣長は感慨深く振り返る。息子が13歳になれば必ずお礼参りをさせる約束した父は、彼が11歳の時に「くくなり、母がその約束を違えず13歳の宣長を水分神社に詣でさせたが、その母も今はない。この段「菅笠日記」上巻のまさしく山場で、このことを書くために紀行をつづったかと思えるほどだ。次回もう少し詳しく述べ）にしよう。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（刀）略歴】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック詳説」、「暗黒事件」など。

## 松阪の知の系譜 本居宣長 小津久足 小津安二郎

(21) フランス文学者

柏木 隆雄

新しく年を越したこともあり、改めて宣長の「墓石日記」の冒頭、松阪をたつて市場の庄を過ぎての記事をもう一度引く。

宣長一行が小川村に入り、村の名そのままの小川が流れる里を通って、みやこ川の板橋を渡れば都の里。都に帰る斎宮に供する宮女たちが、そこで伊勢に残る者との別れを惜しんだ故事から「都」の名が付いたという。

別の清水をくむ井戸が「忘れ井」で、他の場所にその跡だといふ碑があるが、都の里にあるのが本当の井戸だという人もいる。むかし斎(いつき)の宮の女房の言葉の「せん」と「忘れ井」という清水は、千載集旅に齋宮の甲斐(作者の名)別れゆく都の方の恋しきにいざ見ん

わすれ井の水今その跡とて。かたをつくりて。石ぶみなじを立たる所の外になれど。そはらぬ所にて。まことには此の里になんあると。

宣長一行、小川村から川を渡って都の里へ

であるかは断定できない。もつと詳しく述べたいが、「行く先の急がるれば」と宣長はそのまま立ち去る。早急な断定を避け、文献と実見とを合わせて後の考究に待つとする彼の実証主義が、はつきり現れて印象深い。

## 宣長の実証主義示す

雨は相変わらず降りやまず、同行の門人たちと「かくては吉野の花いかがあらん」と言い交わしながら、宣長は、

川上のゆつ岩村に苔(こけ)むさず、常にもがもな常處女(とこをとめ)にて

春雨に干さぬ神よりこのたびはしをれむ花の色をこそ思へ  
の自作を記す。「このたびは」と旅と度を掛けて、雨と涙に袖をぬらして、花も同じ憂き目に遭つてゐるので、夢う歌で、旅の記事を和歌でつなぐ中世から



青山峠頂上の追分地蔵(『墓石日記』写真集)(あいの会)から

山路の道中、さて「下らん」とする所に。石の地蔵あり。伊賀と大和の境なり。名張より一里半ばかりぞあらん」と書く。地蔵はおそらく「あいの会」写真集に載る追分地蔵だろう。「富川まで二十里」の文字がはつきり見える。

雨が降つたりやんだりの中を

山路の道中、さて「下らん」とする所に。石の地蔵あり。伊賀と大和の境なり。名張より一里半ばかりぞあらん」と書く。地蔵はおそらく「あいの会」写真集に載る追分地蔵だろう。「富川まで二十里」の文字がはつきり見える。  
(毎週土曜掲載)

**柏木隆雄さん(元略歴)**  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』」など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

板坂燐子氏に従えば、芭蕉の「おくのほそ道は中世の紀行文に倣つて、つらく、憂き旅を書いて、旅の実用、愉悦を説くことの多い江戸紀行文の中でも孤絶した作品だ」という。

しかし、「おくのほそ道」の異色は、平安以来の紀行文が、それの文章をつなぐ要として和歌を用いるのと異なり、俳諧発句によつて文章をつなぐところにある。有名な冒頭、「月日は百代(ほくたい)の過客にして行

旅情と知識、見識が  
バランス良く配分

宮古の忘れ井(写真集「菅笠」)  
記」から)



挿絵の忘れ井の現在の姿は、

かふ年も又旅人也」で始まる文竇に「草の戸も住替る代(よぞひなの家)として「面八句を庵の柱に掛置く」と書くのは、明らかに從来の和歌中心の紀行文への挑戦たたはすだ。

室町後期の連歌師、宗祇(そうぎ)の「筑紫道記」(1480年)も発句が折々入るけれど、それでも自作の和歌や名所・旧跡に関しては他の名歌を差し挟んでいる。和歌と俳諧がほぼ同じ位置にある今日と違つて、和歌と俳句には、今日では想像できないくらい大きな重みの差があつた。

の文章など、実に明晰(めいせき)で、難解などうがほとんどない。そして名所の考証も、決して学を誇らぬ、穏当な書きぶり

あり。むかし斎(いつき)の官の女房の言葉のことせる。忘れ井という清水は、千載集旅に斎宮の甲斐(作者の名)別れゆく都の方の恋しきに、いざ結び見るわすれ井の水今その跡とて、かたをつくりて。石ぶみなどを立てる所の外にあなれど。そは

は今も命脈を保つていて、感嘆しきりだが、掲載の写真を幾つか活用させていただいて、日記の文章をもう少し紹介したい。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(刀)略歴】  
1944(昭和19年)、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

ので、いわば旅情と知識と見識がバランス良く配分されている学者の紀行文ということができる。またそこにこそ芸復興を成し遂げた江戸期の文人の嗜みとしての文章の面目が發揮される。

雨降れば今日は小川の名にし負いて清水流るる里の中道。この村を離れて。みやこ川といいう川。せばき橋を渡りて。都の里前回引いた冒頭の松阪旅立ち

に感心する。例えば、前回の市場の庄から続く雨中の記事を見よう。

夫・邦代夫妻が届けてくださった「菅笠日記」写真集(あいの会、2002年発行)に掲載されており、早速ページを繰つてみると、宣長の旅程に合わせて72枚のカラー写真が、撮影者と説明文付きで印刷されている。夫妻は今も「菅笠日記」読書会のメンバーである。そうな松阪の知の系譜は、先ごろ殿町の姉に同町赤塚利夫・邦代夫妻が届けてくださった「菅笠日記」写真集(あいの会、2002年発行)に掲載されており、早速ページを繰つてみると、宣長の旅程に合わせて72枚のカラー写真が、撮影者と説明文付きで印刷されている。夫妻は今も「菅笠日記」読書会のメンバーである。そうな松阪の知の系譜は、

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

(19)

よき入のよしとよく見てよしと  
言いし 喜野よく見よき入よ  
く見つを引き、20年ばかり前から思い  
付いていた喜野詣でだが、春に

「喜野日記」の道程(板坂耀子「江戸の紀行文」(中公新書)所収)

1772(明和9)年3月5日、喜野は親しい門人5名(その中には稻掛常松、のちに大平と名乗って本居家の養子となる最年少17歳の少年もいた)を引き連れて吉野へと旅立つ。  
「喜野日記」は、まず「万葉集」中の天武天皇の有名な歌

なると都合が悪くなつて、なかなか志を果たせなかつたのを、今度ばかりはとにかく行くぞと心を決めて、すでに出立前日の朝からその準備に怠りないことを記して、きて出発。

これは三月のはじめ、五日の曉。

まだ夜をこめて立ち出(いで)ける。市場の庄などいうわたりにて、夜は明けはてにけり。さて行く道は、三渡りの橋のもとよ

「このわかれ行く方は、以後は非日常の旅路」

夜の明けぬ暗いうちから松阪を出て、庄、三渡橋を通つて行く。松阪に住む人間で三渡橋を

## 菅笠の旅、いざ出発

知らない者はいないだろう。宣長にとつても何かの機会に時々往復する普段の光景であつて、そこから左に折れて、ようやく山道となる。

阿保は「あお」と読んで、今の青山町。近鉄電車が長いトンネルで山を抜ける名張、榛原へと此の道も、むかし一度一度は物せしかど。年経(へ)にければ、みな忘れて。今はじめたらんよ

り。左にわかれて、河の沿いをや上りて、仮橋をわたる。此(こ)のわたり迄(まで)は、事にふれつつ、をりをり物する所なれば、珍しげもなきを、このわかれ行く方(かた)は、阿保越えとかや言ひて、伊賀国をへてはつせに出(いつ)る道になんありける。

続く当時は山越えの道のりで、三渡橋を渡るや分かれ道に差し掛かり、はるかに行路を思いやつての感概が「このわかれ行く方は」の文字に込められていく。つまり「珍しげも」ない普通の日常と、以後の「非日常」の境目を強く意識しての緊張した心持ちを表すものだ。

「はつせ」は、もちろん旧の初瀬寺、現に長谷寺のある辺りだが、初瀬の文字に浮かぶ「初」の新鮮な気分と、川治いの意と機会を意味する「瀬」が合わさつて、いかにも川治いの道に立つて、いかにも川治いの道に立つての旅心が、「はつせに出る」という表現で存分に示されている。続けて、

ある。「一回は来たことがないでいた身には、何もかもが珍しい。夕方になつて雨模様となつた。景色も陰鬱(いんうつ)になつた。若物も流れそぼつて、たちまち嘆き顔になるのも、また「おかしく」と書く。「土佐日記」や「更科日記」を見る古人の旅の苦労と旅情を興してもいなかった。」(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(77)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者 柏木隆雄

日本には古来「日記」と題される書き物がある。日記といつても「旅の日記」であることが多い。古くは平安時代の紀貫之「土佐日記」(935年)や「更級日記」(1060年)また鎌倉時代の阿仮尼「十六夜(いざよい)日記」(1279年)など、いずれも貴族や歌人が地方から京へと上ったり、京から下る記録だ。貴之が土佐の任地から京の都へ帰り着くまでの日々(にち)を記したのが「土佐日記」だが、海上の風次第で船出を待た

ねばならず、やっと船をこぎ出しても、夜更けて、西東も見えずして、天氣のこと、舵(かじ)取りの心にまかせつつ、男も慣らわぬは(男でも慣れないで)、いつも心細し

と心細げな様子を示す。貢之阿仮尼の2人はともに60歳前後とあれば当然のことながら、中世の旅は、しばしば非日常のつらさ、不便が嘆かれる。それを癒やすのが口頭たしなむ和歌で、書き手の教養を示すためあろうが、「日記」に歌が添え

られた。

の書が画期的なのは、名所、旧跡の興趣を、それまでの和歌ではなく発句で紡いでいったことにある。江戸時代に諸国の人々が著されたのが「土佐日記」以来の伝統となつた。

## 日記、紀行文の伝統

「更級日記」は、夜中に箱根越えする少女の恐怖が生々しい。阿仮尼の「十六夜日記」も、土地相続を訴えに京から鎌倉へ下る際の記録で、近江の野路といふ地に差し掛かつて、早くも、

しかし江戸時代になると、旅の日々の苦難や作歌の披露ばかりではなく、非日常の興趣を記す紀行文が盛んになる。宣長の「菅笠日記」も、「菅笠」とあるよう紀行日記である。芭翁の「奥のほそ道」(1702年)はそうした紀行文の最初の名作で、こ

の書が画期的なのは、名所、旧跡の興趣を、それまでの和歌ではなく発句で紡いでいたことにある。江戸時代に諸国の人々が著されたのが「土佐日記」以来の伝統となつた。

中世の日記、紀行文が、何らかの私的、公的な目的で、よんどろろなく旅をしたその労苦を述べるに対し、江戸期の紀行文は、自らの興味から各地を巡り、その記録をとどめるものが多いため、執筆の動機は「自分の老後の楽しみ」と「子孫に読ませるために」の二つにほぼ尽きる、と板坂は言う。

江戸の紀行文は「奥のほそ道」の他にも優れた紀行文があるとして、彼女が八つのえりすぐりを紹介する中で、宣長の「菅笠日記」を挙げ、「現実を理性と共存させて容認できる」宣長の優れた資質が「散文として雑然とした多様な内容を含む」紀行文において「十分に生きかされた」と評価している。

(毎週土曜掲載)



板坂耀子「江戸の紀行文」  
(中公新書)

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バルザック詳説」「暗黒事件」など。  
(毎週土曜掲載)

# 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

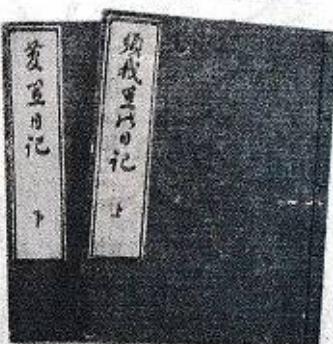
く。  
その旅日記「突貫紀行」(1893年)は「身には疾(やまい)あり、胸には愁(うれい)あり、  
(中略)欲あれども錢なく、望みあれども縁遠し、よし突貫して此(この)逆境を出(い)でむと決したり」と書きだされて、いかにも才ある青年の突進的情熱をよく表している。

それに比べると本居宣長の

「菅笠日記」(1795年)  
は、1772(明和9)年に  
大和国吉野へ門弟たちと出

去年から今年にかけてのコロナ禍で思うような旅行ができないと嘆く人が多い。誠に旅は心伸びやかに、未知の光景に触れ新しい自分を発見するまたない機会だ。

小説「五重塔」で有名な幸田露伴は、20歳で電信技士として北海道余市に赴任するが、1年たつたたぬかに逃げ出して、北海道から青森へと渡り、そこから郡山まで徒歩で旅して、一月後によく東京に帰り着



「菅笠日記」版本(本居宣長記念館蔵)

掛けた紀行で、宣長43歳の分別盛り、上古学研究がいよいよ大成し、もつとも充実して氣力満ちた時の作だ。

もちろんそれまでにも長旅の経験はある。まず13歳で吉野水分(みくまり)神社への参詣の旅。16歳の時には京都、さらに日本に着かず江戸の伯父の店へ商売見習いに赴き、翌年帰郷。伊勢山に養子に行くも離縁となつて

期の滞在は、若い宣長の貪欲な知識欲に多くのものを吸収させただろう。「万巻の書を読み、千里の道を行く」は、眞の文人が必須としたものだ。

といえ返答一九の「東海道中膝栗毛」(1802~14年)を持ち出さなくても、当時の旅はいろいろ不便が多かつたろう。しかし当時の人にとってほんとは案外当たり前のことだ。

## 弟子との長旅

### 「菅笠日記」

23歳で医者になるべく上洛(じようらく)、滞京5年の業成つてようやく、滞京5年の業成つて受け入れられていたのではないか。戦後間もなくの頃でさえ1時間歩いて学校に通つた生徒が多くいたものだ。

最初の吉野行は、さらに足を伸ばして和歌山、長谷を巡つて松阪に帰った。そのいずれの旅も、若い身での不安と希望が交錯したに違いない。

### 人生充実、43歳の春 2度目の吉野への旅

宣長が2度目の吉野への旅を計画したのは43歳の春。3年前に師と頼む賀茂真淵が死去し、

そのことでいつそう自立の精神も高まり、「古事記伝」最初の巻を前年刊行して、充実感を味わう時期だつたと思われる。

名高い吉野の桜を門弟たちと

愛(め)でる楽しみもあつたらうが(子)が授かるように宣長の両親が祈り、その靈験あらたかに彼が出生した水分神社に再び参詣する目的もあつた。

42歳は男の厄年である。それを無事に過ごした安堵(あんど)感と、新しく学者としての面目も新たな「本居宣長」として水分の神に見参(げんざん)する自信に満ちた旅だったのではなかろう。(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(77)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「バルザック著『暗黒事件』など。



フランス文学者

柏木 隆雄

年譜でたどると、村岡の言う第4期に一斉に芽を吹くように現出している。

「古事記伝」(1790~1822年刊行)にしても、前回紹介

した「美濃の家」(1795年)、「古今集遠鏡」(1797年)などの歌集の注釈、日本人の文學的感性に大きな影響を与えた「源氏物語の小串」(1799年)の物語論、紀州藩主に示した政談、学問論を含む「玉勝間」(1795~1812年)の隨筆など、宣長の著

行だ。つまりそれだけ宣長の

凡人はほんのわずかなことで舞い上がり、多少人に知られたり、弟子などといふものが出来

ひたすら穩健な日常  
貴いた学者の人生

名声が広く知られるようになつた証だが、同時にどれほど彼が学問の蓄積と円熟に時間を費やし、その発現に慎重であったかを物語るだろう。

名聲が広く知られるようになつた証だが、同時にどれほど彼が

昼は小兒科医として勤勉に励み、夜は自宅での講義で近隣か

の吉野への旅ではなかつたか。

真淵との師弟関係は、時に手

紙のやり取りを通して激しい議論となつても、33歳年長の真淵

が寛厚な態度で接して、宣長の

(しじ)として後の大著として結晶する稿を継いだ。しかも必要な文献を手に入れるために、あるいは家計のやりくりに腐心して、津の薬種商に養子にやつた次男の家に借財をしながらも、

客氣を押さえることもあり、さらには彼の驕足(きそく)を伸ばす大きな力となつた。彼が書斎に「県居之靈位」と真淵の号を自筆して勉學の度にしのんだのは、師へのあつい思いを示している。

## 宣長の生涯を4期に

たりすると、著述を出版して世に問いかける力を知らしめた

ひたすら学者の穩健な日常を貴く人生だった。

今一つ大きな事件はやはり吉野への旅行だろう。次回に吉野旅行をつづった「菅笠日記」について書いていく。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(7)略歴】

1944(昭和19)年、松阪

市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

村岡典嗣は宣長の生涯を、第1期として彼の出生した1730(享保15)年から51(宝曆5)年までを「幼時および普通教育」、同年から63(同13)年までの第2期を「京都遊学および歌学び研究体制時代」、64(明和元)年から88(天明8)年までの第3期を「上京学研究および大成の時代」とし、第4期89(寛政元)年から1801(享和元)年までを「晉及時代」として4期に分けている。宣長の学問的成果を



村岡典嗣「本居宣長」  
(1928年、岩波書店刊)

宣長は松阪の市井にあって、

入門、そして親しい門人たちと



フランス文学者

柏木 隆雄

「古今集遠鏡」(1797年)は、古雅な和歌を現代語に訳して示す参考書の先駆けだが、宣長が作歌の際、最大最良の手本とした「新古今集」については、その2年前の「美濃の家づと」(1795年)がある。

書名は、前書きに宣長自身が言うように、1790(寛政2)年美濃の大垣から「新古今集」の第2回目の講義を聞きに来た大矢重門が、1年受講の後に帰郷する時、大矢のさまざまな問い合わせ、「家づと(家への土産)」とし

感動に重きを置いて  
鑑賞者の態度で説く

意訳すれば「これだけでも家の土産にもつていきなさい。伊勢の海(すなわち宣長の学塾)で学んだことは、舟を降りて權(かい)」=甲斐(かい)と掛けるのが無くなつて(渚すなわち無きに掛け、頼りとする權である宣長がいなくなつて)、海の藻屑(なぎさ)のような物にしてもとでもなうか。

遠曆に達した宣長の弟子への愛情と、師としての矜持(きようじ)が見て取れる。大矢はこの書の出版を師に提案、翌年5巻5冊の本となつた。

これをだに家づとせよいせの海(かひは渚(なぎさ))の藻屑(もくす)なりとも

山ふかみ 春ともしらぬ 松の玉  
戸に たえだえかかる 雪の玉  
水

今集遠鏡」と同じく、宣長の講義が「遠鏡」が古歌の現代語訳なのに対し、「美濃の家づと」は、例えば式子内親王の歌、



「美濃の家づと」版本  
(本居宣長記念館蔵)

## 批評の先駆「美濃の家づと」

を「めでたし、詞(こば)めでたし、下句はさら也(なり)、春(まき)の葉に霧立ち上る秋の夕暮れ

むら雨の露もまだ干ぬ楓(まき)の葉に霧立ち上る秋の夕暮れ

には「めでたし、むら雨は晴れたるが、その露もまだ干ぬ間に(乾かないうちに)、又霧の立ちほりてはればれしからぬ山中のさま也」と解説する。

ここも歌の趣きや鑑賞のポイントを説き、講義しながらいかにも感嘆したように、歌を節め、「家づと(家への土産)」とし

ともしらぬ松とづきたるも趣の外のあまりの句ひなり(想像以上)べた褒めの感想が並び、「趣の外のあまりの句ひなり(想像以上)に雰囲気が良く出ている」など、分析よりも歌としての感動に重きを置く形の批評が主となつていて、百人一首で有名な寂蓮法師の、

これはあたかも現代の歌壇の評論の態度、新聞の短歌欄や俳句欄の選者の選評に通じるもので、和歌の現代語訳とか、鑑賞に重きを置く現代の批評家たちの源流が、本居宣長に発することが、この2著を読むと確認される。(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19年)、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎  
(14)

フランス文学者 柏木 隆雄

宣長が心魂を傾けた著述は「古事記伝」だが、彼は「源氏物語」や「古今集」を愛読し、京都での修学から帰つて、29歳で最初に弟子たちに講義したのは「源氏物語」であり、これは72歳の最晩年まで続けられた。「万葉集」を講義に取り上げるのは32歳から、37歳で「新古今集」、「古今集」は45歳で扱つている。以後題材ごとに講義の日を決めて40年間続けた。肝心の「古事記」はほとんど講義にのせて



「古今集遠鏡」版本  
(本居宣長記念館蔵)

講義の外に、彼が何よりの愉悦としたのは作歌で、20歳の時に正式に歌道の師に付いて学び始めてから、生涯その楽しみを捨てなかつた。村岡典嗣は「歌作数十年の歴史において、ほとんど成長も発展も見られない」と断定し、現在の研究者でも彼の歌集「鈴屋集」を「丹念に読む者など、歌人は言う

いない。その魅力を伝える楽しみとしての講義と、本来の研究とを、しっかり分けていたのだろう。

論じる余裕がない。

「古今集遠鏡」の訳は俗言(サトビゴト)で

宣長は「新古今集」を最も歌集として作歌の模範としてい

## 宣長の愉悦は歌作り

たが、彼の講義と和歌への打ち込みようは「古今集遠鏡(とおかがみ)」に見ることができる。

「古今集(恋歌)」にある、

「うき草のうへはしげれる」とのなき

ふちなれや深き心をしるひ

有名な

遠鏡は今で言う望遠鏡。見えにくいものもはつきり見えるよう

に説くといふもので、たとえば

ほととぎすなくやさつき

のあやめ草あやめもしらぬ

恋もするかな

は「わしが深い心底(しんてい)は、上には浮草の茂つて見えぬ淵じやかしてこの深い心底を人が知ってくれぬ深いことが見えぬそう」と宣長のいふと

の歌を「どのような訳な物やら

に及ぼす宣長研究者でもほと

んどあるまいと思う」という人

がある。宣長の自負と真逆の評

価については、今これを詳しく

論じる余裕がない。

（本文の片仮名表記を読みよい

ように書き換えた）。

今の受験「古典」に見る原文

訳文の構成は、実に宣長の発明

で、やたら高雅で近寄りがたい

勅撰集が、当時の人にもそれこ

そ遠眼鏡で見るようにくつき

るうそくの明かりの中、こん

りと明らかになる、という訳だ。

「古今集(恋歌)」にある、

「うき草のうへはしげれる」とのなき

ふちなれや深き心をしるひ

有名な

有名な

有名な

有名な

有名な

有名な

有名な

有名な

有名な

この「俗言(サトビゴト)」で訳す。

彼はこの本冒頭の「例言」で、

中世の語法に対し、個々の場

合に応じた訳語の規則を、いち

いち例示して読者の理解を求める

。いかにも学者としての

用意と主張が丁寧に述べられて

いて、あたかも宣長の講義に実

際に参加している気分になる。

わってきましたのは……」と訳してい

る宣長の声が聞こえるようだ。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「暗黒事件」など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

絶する。太平洋戦争真っただ中の出版は極めて困難だったこと、村岡の46(同21)年の死(享年62)に加えて、敗戦で世相が一変したのも大きい。

時代の波にほんろう  
宣長の真価、再評価へ

昭和初期から、右翼や軍部などが神国思想を持ち出し、

国産たばこや特攻隊の名称まで宣長の「敷島のやまと

居宣長」は、西洋哲学的素養の下に、厳密な文献学的手法を用いて、宣長の學問の意義を説き、彼の師、波多野精一が彼に宛てて

「文献学の二つの大切な任務――語源と歴史的叙述――」を果たすと書く通り、客観的記述に満ちた画期的な著作となつた。

その村岡の編集になる「本居宣長全集」(岩波書店刊、1942~44年)は、数十巻を予定して期待されたが、わずか冊で中

止めた。大量の書籍の虫干しも毎年欠かさず、空襲で火が出たら、油紙で包んで縁側に並べた遺稿を、すぐに庭に掘った大穴に投げ込む用意までしていたとい

う。その死の2年前、すでに寄付済みの宣長旧宅跡の建物、宅地に加えて、鈴屋の文書、遺品の一切を、それらを収める資料館が

月後事を長男彌生に託して89歳で没した。

梅川市長は、これを最大の責務として奮励、金松阪市民に呼び掛け、政財界の協力も得て、70(同45)年11月、当時の金額で建設費4500万円を掛けて、4881点の遺品を収める記念館を完成させる。しかし彼はその年の4月4日肺がんのために

建設されることを前提に、清造は梅川文男松阪市長(当時に寄贈を申し出で、63(同38)年9月、後事を長男彌生に託して89歳で没した。

## 梅川文男元市長の功績

建設されることを前提に、清造は梅川文男松阪市長(当時に寄贈を申し出で、63(同38)年9月、後事を長男彌生に託して89歳で没した。

62歳で死去、式典のテープを切ることはできなかつた。

梅川は、戦前は共産党員として転向を肯(がえん)じず、戦後

共産党の方針を批判して離党、県会議員の後松阪市長に当選。

彼のひょうひょうたるエッセイは市民からも親しまれた。松阪市の戦没兵士たちの手紙を集め

て「ふるさとの風や」(三書房1966年、95年復刻)出版の功績もある。



宮長遺愛の柱掛け鈴を持つ梅川氏(本居宣長記念館提供)

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(刀)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(12)

フランス文学者

柏木 隆雄

先週は松阪市美術展覧会の入賞作品の掲載ということで、私の稿が1回お休みとなつた。そこでできょうはちょっとと息抜きをさせていただき、連載の余波を書かせてもらおう。

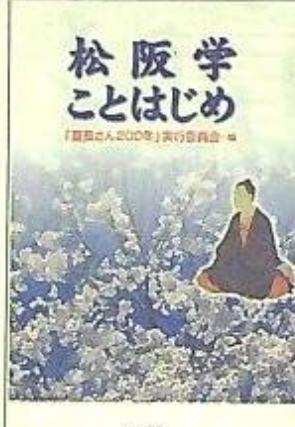
2週間ほど前、四日市に住む89歳になる長兄が、夏の暑さの故か、にわかに体調を崩したと。うと訪ねたところ、お前は宇田荻郵を知らないなかつたそうだなと連載第1回の記事を示して、

高利から格太郎まで  
松阪の偉人24人登場

もう一つこの連載を始めて間もなく小学校、中学校と一緒にまた稲葉秀機君から電話があ

また笑われた。そして自分も荻郵の軸を持っているが、持つていくか?と聞く。何年か前に美術商から手に入れたものだそうで、塗りの箱に入った軸を広げてみると、晩年の作らしい金泥で一筆書きのようにさつと描かれた「宝珠」で、ちょっと斬新なデザイン画のように見える。

思いがけない荻郵との出合いと申し出に、私は連載記事の功德を思いながら、ありがたく頂くことにした。兄の娘たちは「高値が付いたら教えてね」とこれも笑つて言うので、まあ、とりあえず預かっておくよ、と答えたことだつた。



「松阪の昨日・今日・明日」というタイトルで、堺屋太一の講演と国文学や日本史などの専門家によるシンポジウムが開催された。企画したのが松阪出身の野呂松阪市長も登壇した第2部シンポジウムの記録もさることながら、「人物列伝」松阪の先賢たち」という第3部は、三井高利、樹敬寺加友、大淀三千風、山村通

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

り、宣長などの連載、楽しみにしている。については「松阪学ことはじめ」という本を知っているか?と問われた。

2001(平成13)年は本居宣長没後200年で、それにちなんだ事業が松阪市を中心に行わ

り、国文学者、故岡本勝愛知教育大教授だ。名古屋で歯科医開業の傍ら松阪の郷土に関わる資料に熱心な稻葉君は、多年教授と親しくして、その記念行事をまとめられた本を教授からもらつてあるから、送つてやるよと

荒井勘之丞、小津久足、竹川竹斎、世古格太郎など、松阪に関係する偉人計24名が、それぞれの

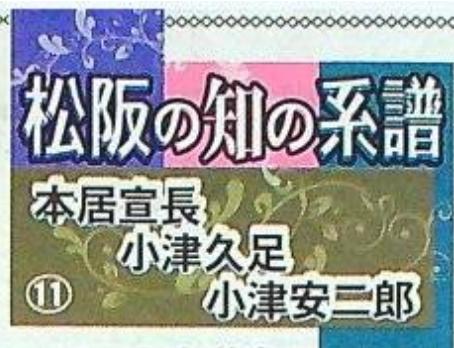
専門家によって紹介される。中には私など初めて目にする人物もいて驚いた。

「持べきは友」と感謝しながら、さてこれからどんな新機軸で語れるか、これら連載の余徳を喜びながら、もう少し本居清造についての稿を続けたい。

(毎週土曜掲載)

## 兄にもらつた荻郵の絵

庵、丹羽正伯、奥田三角、小津勝、悟心、藤田適齋、韓天寿、本居宣長、森川道波、森壱仙、本居太平、服部中庸、三井高蔭、本居春庭、小津美濃、殿村安守、高見式部、荒井勘之丞、小津久足、竹川竹斎、世古格太郎など、松阪に関係する偉人計24名が、それぞれの



フランス文学者

柏木 隆雄

かに彼の書き物を大切にしたか  
ということだ。

宣長の長男春庭の一生を追つて、自分の人生に重ね合わせた足立巻一の名著「やちまた」(中公文庫、2015年)に

「宣長の子女たちは、一様に父を敬愛し、生前に

は一致してその研究を

助け、没後は春庭を支え、家門を守つた。そして宣長はじめ一族子孫の文書、遺品が、彼らの愛情によって「歴史の激動期をくぐり抜け、奇跡のように伝えられた」とある。

## 宣長の偉業伝えた人々

がのびていて、「老人とは思えぬ清造を印象深く描いている。

清造は、宣長の長女飛騨が後妻として嫁いだ高尾家の孫で、松阪本居家に嗣子として入った信郷の次男である。

孫の孫の清造氏が  
戦前に全集を編む

春庭旧宅の蔵にそつくり收められ、宣長には曾孫にあたる信郷の次男清造が、東京移住後も整理保存に努めて遺漏なきを期し



本居清造  
(本居宣長記念館蔵)

(博文館)を編集刊行、第3巻は原稿が関東大震災のために焼失して完成しなかった。しかし、その5年後、盲目の春庭に代わって宣長が養嗣子とした弟子の本居平の後裔本居豊穂(とよかい)との共編として「増補本居宣長全集」全12巻(うち第11巻は本居春庭・本居大平全集、第12巻が本居内遠全集)を出して、その責を果たした。

戦前の宣長研究の基本的文献といえば、この清造編「本居宣長全集」と村岡典嗣(つねつぐ)「本居宣長」(岩波書店、1928)

た。学生時代に東京の清造宅を訪問した足立は、黒のつむぎを着て腕を組む「丸刈りの頭は黒いし、ひたはサクラ色に光り、そこから高い鼻梁(びりょう)

て、帝室編集官に就く傍ら、それら遺稿の整理を怠らず、1922(大正11)年から23年にかけて「本居宣長稿本全集」全2巻

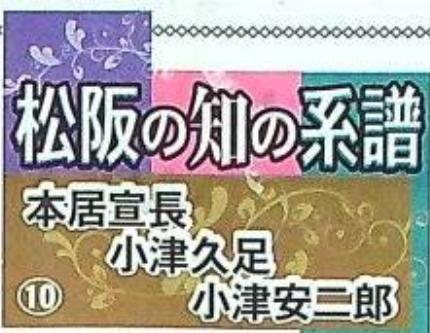
年に指を屈する。

村岡の著は警醒社版(1911年)が初版で、早稲田大学を出て外字新聞の記者をしていた彼は、この書作で高い評価を得て学界に入り、以後日本思想史家として大成する。

その村岡を導いたのは早稲田で西洋哲学を教えた波多野精一だつた。波多野は今も価値を失はない「西洋哲学史要」を28歳で書いた日本を代表する宗教哲学者で、彼が最も尊重した愛弟子の一人が宣長の研究で名を挙げるのは、先に説いた西洋哲学的思考に宣長が合致する好例と言えようか。(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(77)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

ひに胸が熱くなる。  
それはもちろん宣長の学問や人格の偉大さによることは間違いないが、家族や友人、門弟がい



フランス文学者

柏木 隆雄

「古事記伝」が宣長の主著なのは言うまでもないが、もちろんそれだけではない。「源氏物語」「古今集」など中世文學は彼の最も愛好するところで、優れた注釈書も書いている。古典の注解のために基本となる古語の文法や音韻についての研究成果は「てにをは」や「係り結びの法則」、漢字の漢音、唐音、吳音の区別、仮名遣いの整理など、語学上重要な発見につながった。

今風の和歌を詠むことを好み研究ばかりでなく、新古

68（昭和43）年から刊行が始  
表稼業の医師、特に小児科医としての往診や、施薬した記録まで丁寧に取つていて、当時の薬代や往診料の値まで知ることができ。部外秘の秘薬（今なら滋養強壮剤とも言おうか）の調合法までも残されている。

昭和から平成まで  
四半世紀かけ完結

で、生涯に万を超える作歌があり、紀州藩主に与えた政論や「玉勝間」などの學問的隨筆も残した。宣長が極めて筆まめな人であることは、本居記念館に展示されている幼児からの筆写はじめとして、あらゆる事柄に克明なノートを取りついている事実からも実感されよう。



本居宣長の診察記録「済世録」  
(本居宣長記念館蔵)

が挟まれていて、そのはるかな年月を感慨深く思いやつた。  
優れた全集は、できる限り著

## 本居清造氏の功績

定の40巻を終えたのは40（昭和15）年、また「クレオパトラの鼻」がもう少し高くなれば、地球の全表面は変わつていただろう」と書いたパスカルの全集は64（同39）年の第1巻から92（平成4）年第4巻の後、2021（令和3）年の現在まで以後の巻が出ていない。個人編集の碩学（せきがく）メナール博士が亡くなつて完成が危ぶまれている。

ライプニッツやホイヘンス、ヴォルテールなど各國が誇る偉人の全集は、一種の國家事業のような形で、何年かかろうと継

まり、最終配本は93（平成5）年。実際に25年の長きにわたって専門家と書店の協力によって完結した。この稿を書くために最終回配本の別巻3を開いたら、予約購読していた大学生協の納品書

が挟まれていて、そのはるかな年月を感慨深く思いやつた。  
優れた全集は、できる限り著

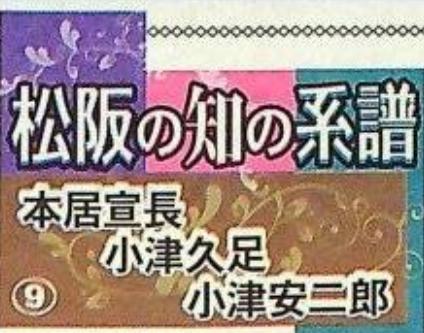
作を収集して周辺の資料、断簡も怠りなく備えて、作家の全貌をくまなく知ることを目的とする。12（明治45）年に始まるコナール版バルザック全集が予

続して刊行されるのだ。

筑摩書房が何度も經營危機に見舞われながら、「本居宣長全集」を完成したのは壯舉と言るべきだが、多大の時日を要するほどに充実した内容を盛り込めたのは、ひとえに宣長の膨大な著作が、その家族や門弟、縁者をして宣長の子孫たちによって大切に継承、保存されてきたことによる。中でも松阪本居家の後裔（こうえい）、本居清造（1873～1958年）の存在が極めて大きい。宣長全著作が今日に読める幸福は、彼の努力によると言つて過言ではない。

（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（アーティスト）】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バサルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。



本居宣長

小津久足

小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

(9)

前回、「古事記」上巻神代六之巻、姿を隠した天照大神が岩戸をそつと押し開く一文と、それに付される注をわずかながら引いた。一字一句に漏れなく言つていいくらいの注は、本文の読みとともに、著者の最も自負するところで、「古事記」上巻の注をほぼ書き終えた48歳の宣長が、小田原在住の飯田某への便りに、一般に物知りの人は注は少ないのが良いとしているが、自分の注は詳しい上にもなお詳しくしようと思うから、「うるさ

きまで長々しく」、本文に關係ないくだらぬことをされ、「何くれと書き加えて、大よそ古学の道は、此（この）ふみに尽く」そう志している、と書く通り、注記こそは宣長の本領を示すものだつた。

それをほんの一言ばかりの例示で済ますのは、まことに本質をわきまえな

い暴挙とは知りながら、紙幅の都合で、その実際は、図書館で宣長全集を開いてもらうしかないと。筑摩版全集で「古事記伝」は第9巻から第13巻まで、2千字を超える分量となる。

導入部分の「総論」は「スペテノサダ」と読む

「古事記伝」之一巻の冒頭、イントロダクションとしての「古記典等総論」は、「古記典」を「アシエブミ」、「等」を「ドモノ」、

## 注記こそは宣長の本領

に依拠し過ぎて、どれほど本来の自然な心がゆがめられたかを説き、古来尊ばれてきた正統な漢文「日本書紀」よりも、日本の古意のままに古語で表された

「訓法(ヨミザマ)の事」では、「古事記」の「訓(よみ)方」を

「古事記伝」版本(いすれも本居宣長記念館蔵)

したがて見いだ

「総論」を「スペテノサダ」と振り返名が付けてある。彼は徹底して漢文の音読みを厭(いと)い、いわゆる和音で表記しようとした。

「総論」は、これまで中国古典事記に表れる漢字表記の万葉仮名の全てについての「仮字(かじ)

の文法を説く。「総論」の最後にある「直麗靈(なおびのみたま)論(直麗とは物忌みが終わつて、平常の生活に戻ること)」は、やがて宣長の一部の弟子たちによって極端に推し進められていく「神國日本」の思想的根拠となつた。

「総論」を書いた1771(明和8)年は、宣長41歳。文字通り男盛りの自信に満ちた姿が立ち昇つてくる。「古事記伝」の筆を置いたのは98(寛政10)年、67歳の時で、64(明和元)年の執筆から実に35年、その業に倦(う)むことはなかつた。

和8)年は、宣長41歳。文字通り男盛りの自信に満ちた姿が立ち昇つてくる。「古事記伝」の筆を置いたのは98(寛政10)年、67歳の時で、64(明和元)年の執筆から実に35年、その業に倦(う)むことはなかつた。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(ア)略歴】

1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バーバルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など」。

# 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎  
③

フランス文学者

柏木 隆雄

前回、「古事記」上巻にある天照大神が高天原の天の岩戸に隠れて、天地が真っ暗になったので、彼女を呼び戻して元の光を取り戻そうと天宇受賣命（あめのうずめのみこと）が肌もあらわに踊ると、神々がうち騒ぐ。それを天照大神が、岩戸をそつと開く一文を引いた。

於是天照大神以為怪細開天石屋戸而内告者因言隱坐而以為天原自闇。

この漢字文に、宣長は「ココニアマテラスオホミカミ ア

ヤシト オモホシテ アメノイハヤドヲ ホソメニ ヒラキテウチヨリ ノタマヘルハアガ コモリマニヨリテ アマノハラ オノヅカラ クラシ」と読みを付ける。今の表記に直せば、「ここに天照大神怪しと思ほして、天の岩戸を細めに開きて、内よりのたまへるは、わがこもりますによりて、天原おのすか暗し」となるうか。

「細く」でなく「細めに」  
1字1句にこだわり

「古事記伝」は本文全てに振り仮名が付けられて、宣長の読みを示している。さらに行文の語句で読みにくかつたり、疑義が起こり得る個所、典拠を明らかにする必要があるものに、量をいとわず、できるだけ細かく注を付けている。例えば、「細開」と



「訂正古訓古事記」(本居宣長記念館蔵)

## 「古事記伝」の注の細かさ

すなわち「細開は細く聞く」ではなく、「細めに聞く」のであって「所見」の「ミエ」が縮まって「メ」の音だと説明する。以下ほどんど1字1句に注と言つても

ない。

学問的研究において、自分が考究した結果正しいと信じる説を、あらゆる論理の筋道を示して証明するものだが、自分だけ納得しても仕方ない。むしろその所説を立てている自分自身が、自説の不備を自ら認識して自身に問い合わせ、その間に説得力のある答えを自分に示して進まねばならない。

宣長の注釈に臨む議論は、それこそ用意周到、厳しく断定しつかしも解釈において偏狭でなく、著者の懐の深さも兼ね備え

いう字句について、「本曾米爾比良伎豆（ホソメニヒラキテ）と訓（よ）むべし。」と注して、「書紀の訓も然り。」と根拠を挙げ、この「米（メ）」が、「所見（ミエ）」が切（ツヅマ）りたる辞なり」、

過言ではない。

しかもこれら読みの論拠を説く注は、博引傍証、まことに息をのむばかりで、下手な推理小説を読むより面白く、ここで詳細を引用できないのは遺憾極まり

98(寛政10)年の脱稿まで、実に34年の歳月をかけて「古事記」全巻を、膨大な本文校訂、註釈を備えた「古事記伝」四十数巻にまとめ上げたのだ。

今日の学問的水準から見れば

誤りもあるようだが、「古事記」研究は、今も宣長の「古事記伝

から全て出発することに変わりはない。21世紀の私たちも、せめてその数だけでもひもといてみれば、未来の知への大きな勇気をもらえるのではないか。

か。

(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(7)略歴】  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

(7)

フランス文学者

柏木 隆雄

日本最初の歴史書「古事記」上・中・下の3巻ができたのは8世紀初め。天武天皇からの事業を引き継ぐ形で、元明天皇が太安万侶（おおのやすまろ）に命じて稗田阿礼（ひえだのあれ）の語りを筆記させたとされる。上巻は高天原（たかまがはら）の神々、天照大御神の誕生、須佐之男命の高天原追放から大國主命の出雲の国ゆづりまで、中巻は神武から応神までの伝説的天皇下巻が仁徳から推古天皇までの歴史となる。

「古事記」の写本から正確な本文を定める  
そうした志ある人たちの努力の成果として、江戸期までに残っている「古事記」の写本（中世紀の真福寺写本は有名だ）を、宣長はすべて閲覧して、その正確な本文を定める。この第一段階でさえ極めて困難で、気の遠くなるような根気が必要だ。が、その上、全て漢字で書かれてはいるけれど、日本語の訓（よ

原本はその百数十年後に内裏の火事で焼失したものの、宮中、あるいは寺社に写本として千年の間、大切に保管あるいは筆写されてきた。貴重なテクストが残っているだけでも稀有（けう）のこと、それをさらに筆写して伝えていく。五輪の聖火のように、走者が次々に引き継ぐ誠に尊い作業だ。

## 宣長の作業は実際に綿密

みと変則の日本の漢文で綴（つづ）られている古代文を、どのように訓をつけ、どのように読み、解釈するかがまた大問題。仮名文字ができるしなかつた時代、全て日本語の表記は漢字

み、その意味を丁寧に、確実に決定していく。しかも人名、地名、古代の様式、その注釈の対象となる部分は、ほとんど扱う単語の数と同じくらいある。

宣長の作業は、実際に綿密で

いたる。その意味を丁寧に、確実に決めていく。しかも人名、地名、古代の様式、その注釈の対象となる部分は、ほとんど扱う単語の数と同じくらいある。

宣長の作業は、実際に綿密で



筑摩書房版「本居宣長全集」

嘆に値する。それがどんなにすごいか。「古事記伝」の一部をちょっと見てみよう。

高天原の天の岩戸に隠れた天照大神が、天宇受賣命（あめのうずめのみこと）のいかがわしい踊りを見て、神々が大騒ぎする声に驚いて、天の岩戸をそつと押し開く場面。

「於是天照大神以為怪細開天石屋戸而内告者因喜隠坐而以為天原自闇。」

宣長はその訓み片仮名をこう示している。

【ココニ アマテラスオホミ

【柏木隆雄さん（77）略歴】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」、翻訳に「バルザック著『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

⑥

フランス学者

柏木 隆雄

日本最古の歌集「万葉集」4500余首について、正確な本文の確定と、綿密な注釈を施すことに力を注いだ「万葉代匠記」の著者契沖（1640～1701年）は、摂津尼崎の武士の家に生まれ、幼にして聰明、11歳で自ら志して仏門に入り、24歳で大阪生玉の寺院住職となつた。寺の雜務を疎んじて数年で寺を離れ、奈良、摂津の諸寺で仏典や古籍の研究に没頭、38歳の時、仏門に入った当初の老師

のだったか。口絵写真の志貴皇子の有名な「春を歓（よろこぶ歌）」を例を見てみよう。

【石激 垂見之上乃 左和良  
妣乃 毛要出春爾 成来鴨】  
いう元の万葉仮名は、まず片仮名で「イハソング タルミノウ

「万葉集」の文献学から発した「古事記伝」注釈

契沖の万葉集注釈はどんなものだったか。口絵写真の志貴皇子の有名な「春を歓（よろこぶ歌）」を例を見てみよう。

【石激 垂見之上乃 左和良  
妣乃 毛要出春爾 成来鴨】  
いう元の万葉仮名は、まず片仮

に請われて、その後継となるものの、寺務は友人に任せ、ひたすら著述、研究に専念する。その代表的な著作が「万葉代匠記」20巻で、匠（師匠の意）に代わるとは、注釈の依頼をした徳川光圀、あるいは光國の依頼を受けて業に当たろうとして病に伏し、後輩の契沖に託した歌学著下河辺長流（しもこうべ・ちようりゆう）に代わって記述したもの、の意味という。

## 宣長、契沖の本に感動

これに調子を付けて、春の喜びを示すように舞い踊られた。

こうして歌の訓（よみ）を示した後で「垂見ハ津ノ国ナリ。」から始まって、語句ごとに解釈を施し、さらに古來の歌人たちの類歌を挙げたり、先人の注を

していることが分かる。

この契沖を、宣長は「玉勝間（たまがつま）」の中では「學問は申すに及ばず、古今独歩なり。歌の道の味を知ること、また凡人の及ばざるところ、歌道のまことの處（ところ）を見つけたるは契沖なり」と極めて高く評価している。

（毎週土曜掲載）

に請われて、その後継となるものの、寺務は友人に任せ、ひたすら著述、研究に専念する。その代表的な著作が「万葉代匠記」20巻で、匠（師匠の意）に代わるとは、注釈の依頼をした徳川光圀、あるいは光國の依頼を受けて業に当たろうとして病に伏し、後輩の契沖に託した歌学著下河辺長流（しもこうべ・ちようりゆう）に代わって記述したもの、の意味という。

高校の時は「いわばしるたるみのうえの」と習った歌で、万葉学者の大養孝先生は、教壇で

吟味していく。一首について活字本にして16から26、時にはさらに長々と説き及ぶことになる綿密さで、私たちが知っている万葉4500首の大体が、契沖の読みや解釈から多く出発

ら勧められた契沖の「百人一首改觀抄」を読み、いたく感動したことが、やはり「玉勝間」で詳しく述べられている。「古事記伝」の細密な注釈は、まさしく契沖の文献学から発していたのだ。

思えば、50年以上前の大学院

生時代、「本居宣長全集」全23巻が出て、その厳密な校訂と編

集の評判から、思い切って購入し、「古事記伝」の本文解釈の徹底的な方法に驚嘆、松阪人でいながら、あまりに宣長を知らない過ぎたことに、やつと気が付いたのだった。

【柏木隆雄さん（76略歴）  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「バルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など」。

巻口絵

契沖「万葉代匠記」自筆稿  
(岩波版「契沖全集」第2

## 松阪の知の系譜

本居宣長

小津久足

小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

⑤

日本で言うなら江戸時代初期、フランスの哲学者デカルトが提唱した「知」の方法は、以後ヨーロッパ近代科学の確立につれて、18世紀の「理性の時代」を導き、「フランス革命」へとつながるのだが、文学の世界でも、その批評、研究に大きな影響を及ぼしている。

旧来の批評の主流は、作家や作品について批評家自身の趣味や好惡を色濃く反映するものだつた。今でもそんな批評や研究

がないわけではない（あるいは多い？）が、近代の実証主義に基づく批評、研究はそれを嫌い、作品の成立事情から本文の確定まで、文献を徹底して客観的に分析することに努力を傾ける。

平安後期以降、天皇

を頂点とする宫廷和歌

を中心とした日本の文芸は、「古今集」「新古今集」といった勅撰集を最上のものとして、秘儀的な、ある意味極めて主観的な「歌学」が形成されてきたが、その伝統は、新聞紙上にある短

歌欄や俳句欄の選者評に、現在でも見ることができる。選ばれた「万葉集」は「古今集」などに較べて必ずしも高い評価を得ることなかつた。しかしそのたれで、かえつて民間の学者が優れていることが多い。作者たち

## 宣長、実証研究の金字塔

は有名作家に選ばれるだけで満足するとは思えないのだが。

35年を超えて取り組んだ「古事記伝」



契沖肖像（本居宣長記念館蔵「三哲小伝」より）

「古今伝授」などといふ、おどろおどろしい口伝が権威を持ちだすのは室町、江戸になつてだが、正統な歴史書「日本書紀」に対する批評、研究に大きな影響を及ぼしている。

日本で言うなら江戸時代初期、フランスの哲学者デカルトが提唱した「知」の方法は、以後ヨーロッパ近代科学の確立につれて、18世紀の「理性の時代」を導き、「フランス革命」へとつながるのだが、文学の世界でも、その批評、研究に大きな影響を及ぼしている。

る「古事記」と同様、私選とされる「万葉集」は「古今集」などに較べて必ずしも高い評価を得ることなかつた。しかしそのため、かえつて民間の学者が優れていることが多い。作者たち

の本を、きちんと読んだ人は案外少ないかも知れない。もちろん私自身「心の中の松阪」（第36回、2012年6月2日付本紙掲載）で書いたよ

うに、小さい頃鈴屋旧居の土壁に膨大な量の版木が今にも崩れんばかりに積み上がっているのを、驚いて見ていただけで、その中身について長い間知らずにいたのだから、エラそうなことは言えない。（毎週土曜掲載）

【柏木隆雄さん（76歳歿）】  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。前大学名譽教授。著書に「バーチャルザック詳説」、「翻訳にバルザック『暗黒事件』など。

## 松阪の知の系譜

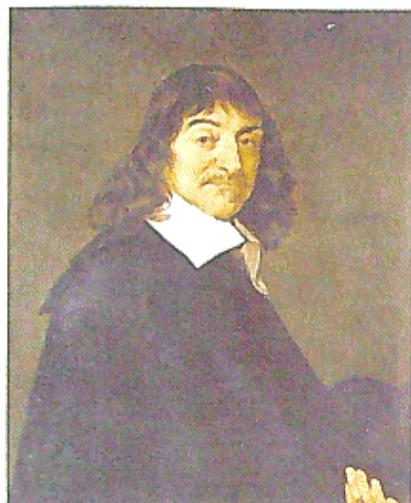
本居宣長  
小津久足  
小津安三郎

④ フランス文学者 柏木 隆雄

前回説いたデカルトの「方法序説」は、さらに特記すべきことがある。それは欧洲の学界を驚かせたこの名著が、学術書の常識だったラテン語で書かれず、平俗とされたフランス語で書かれていることだ。1637(寛永14)年の初版タイトルは、「理性を正しく導き、諸科学において真理を探求するための方法についての説、およびその方法を使って試みた屈折光学、気象学、幾何学論」という長々し

いもので、全体で500ページを超える。序文の「方法論」80ページ足らずが、今に名著として読まれることになる。

19(元和5)年、ドイツ神聖ローマ帝国対フランス、スウェーデンとの「三十年戦争」に従軍した24歳の冬、ドナウ川左岸のウルムの農家に駐屯、深い思索を重ねた



ハルス画デカルト像  
(ルーブル美術館蔵)

## デカルトと宣長、類似

市井のフランス語でつづった。保守的な学者たちは卑しんで読むまいと考へたのか。いや、自分が発見した学問のポイント、「自分で考へる、自分が考へる」ことを、万人に伝えたい思いが強かつたからに違いない。

日本で最初の歴史書「古事記」は、ご承知のとおり、記憶力抜群の稗田阿礼が暗唱したものと、太安麻呂が筆記したもの

このラテン語に当たるのが口本での漢文だ。古来正統の文書は漢字のみでつづられ、漢字の行書、草書から仮名文字が発明され、宮中の女官がそれらを用

いることになる。まさしく貴威張りまくった男たちが蔑称する「女、子供が使う」仮名文学の誕生だ。仮名文字への表向きの軽蔑は、江戸時代にも連綿として続いて、漢字が知識人の要とされた。言葉、そして文字の知識が、世の権力の根源となることは、洋の東西で変わらない。

さて、全文漢字。「万葉集」も音標として漢字で表現されるが、「古事記」では単に音標文字としてだけでなく、漢文として体裁が整う。そのためかえて難解となって、古来宫廷の学者たちが「古事記」の解説を試みてきた。

その努力が江戸時代に入つて、大きな形で実ったのが、本居宣長の「古事記伝」だ。その著作が画期的なのは、前回説いたデカルトの明証、分析、総合、枚挙の4規則を自ずから践(ふ)んでいること、漢文を用いずに仮名文字で明快に記されていることである。(毎週土曜掲載)

【柏木隆雄さん(76略歴)  
1944(昭和19)年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名譽教授。著書に「ババ・ルザック詳説」「翻訳にバルザック著『暗黒事件』など。」

## 松阪の知の系譜 本居宣長 小津久足 小津安三郎

フランス文学者

柏木 隆雄

醉つ払つて「デカンショ、デカンショで半年暮らす、ヨイ、ヨイ」と大声で唱（うた）つたが、「デカンショ」は、一説に「デカルト・カント・ショパンハウエル」を約（つづ）めたものだ。17、18、19世紀の哲学を彼ら3人に代表させたところは、なかなか馬鹿にできない。「私は

目の前で示される事柄を、易しく、また正確に理解するためには、自分の耳でよく聞き、自分の眼で確かめ、さらにそれを自分自身の体験と知識とに照らし合わせて、頭の中でよく整理し、自分なりの考えをまとめる。これが大切だと前回書いた。これは「われ思う、ゆえにわれ在り」と知られる17世紀フランスの哲学者、ルネ・デカルトの受け売りだと悟った読者も多かる。

とにかく、どうかを疑いだすと、確かに、どれもみな怪しくなってくる。遠くで四角と見た建物が、近づいてみれば円筒形だつたり、楽しい経験が実は夢だつたりする。今現に目の前にあること、していることさえ、実は夢かも知れない。こうして何もかもを

そこでデカルトは「考える行為の持つ意味に気がつく。すなわち自分が「疑つている」という事実は確実で、そこから「考

して存在する。

### デカルトの理知主義 科学発展の基礎

「実証主義」は、ある事柄について、それが事実である証拠を徹底的に調べ上げ、主觀を退けた確固とした形で提示する。「実証主義」に基づいて諸科学は発展し、今日の進歩の基礎を築くことになった。

この知を織り成していく作業の方法は、近代西洋に限らない。それが日本にも、しかも18世紀の江戸時代すでに見られる。そのことはまた次回。

（毎週土曜掲載）



書館蔵

初版  
1637年  
パリ国立  
図書館蔵

## なぜ「デカンショ」？

える主体」としての「私」が事実として「存在」することに。眞実に至る道筋は四つある、と彼は言う。まず、明証的に真であると認めたもの以外は、決して受け入れない（明証の規則）。次に、考る問題をできるだけ小さい部分に分け（分析の規則）、さらに最も単純なものから始めて、複雑なものへと至り（総合の規則）、そして最後に何一つ見落とさなかつたか、全てを見直す（枚挙の規則）。

【柏木隆雄さん（76略歴）  
1944（昭和19）年、松阪市殿町生まれ。大阪大学、大手前大学名誉教授。著書に「バーバルザック詳説」、翻訳にバルザック著「暗黒事件」など。

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎  
②

フランス文学者 柏木 隆雄

先号で宇田荻郵を知らないと書いたら、たちまち姉たちから第一小学校の講堂に彼の「築(やな)」だったかが掲げてあったよ。大抵の人は覚えているはず! と笑われた。それに松阪名譽市民第1号は、松工の大先輩丹羽保次郎氏で、2015(平成27)年、その没後40年に校門を入つて左に顕彰碑を建て、碑文を私自身が書いたことを思い出した。荻郵は第2号となる。落語界の桂文我さんや笑福亭生喬さんは、現在活躍している松阪人だが、3年前の2018(平成30)年7月、その文我師

と「二人会」を松阪産業振興会館で催した際、遠い山口市から、小津久足(ひさたり)研究の第一人者、菱岡健司先生も聴きに来てくれた。私の話は菱岡先生の聴取を当て込んだわけではなかつたが、松阪といえば、やはり鈴屋大人(すずのやのう)し)本居宣長と長男春庭、その弟子の小津久

足、久足の後裔

(こうえい)小津

## 「知へ」本質はどこなのか

「二人会」の仕掛け人桂文我さんに誘われて、初めて松阪の「高座」に上がったのは、その前年の17年7月。私の生家の隣人でもある生喬さんも参加して

をうれしく読ませてもらつた。

「二人会」は難しいと最初から決めないで

難しくなるのではないか。人の心の機微を、人生のさまざまな状況に応じて、的確に表現しようとするのは日本の小説と同じで、フランス文学の場合、本能や欲望があるままに認め、それを率直に、あるいは多少のユーモアや皮肉のオブリートに包んで表現するから、かえつて分

かりやすいこともある。内容そのものは柔らかく、易しいのに、「文学の話は難しいぞ」と鎧(よろい)や兜(かぶと)で身構えてしまって、最初から分からんと決め付けてしまうのではない

のかしら。

むやみに軽くも考えないで、た

自分の耳や目で  
確かめること

そう難しく考えず、といって  
と考えるから

「フランス文學」は難しい  
弁解した。

4年前の「三人  
会」のちらし

小津久足 1804~58年。商  
人で蔵書家、紀行文作家。

【柏木隆雄さん(76略歴)  
1944(昭和19)年、松阪市殿  
町に生まれる。松阪工業高校から  
住友金属工業勤務の後、大阪大  
学で学ぶ。現在大阪大学、大手前大  
学名譽教授。フランス文学専攻。著  
書に「バルザック詳説」、翻訳に「  
バルザック著『暗黒事件』など。



名誉市民第1号は  
日本画家の宇田荻邨

新型コロナウイルスの流行が収まらない。1991(平成3)年からほぼ毎年三重日仏協会から招かれて津市で行つてきた文芸講演会は、昨年は中止。今年も開催が危ぶまれたが、コロナ禍で人数制限の上開催され、19世紀フランスの挿絵画家について私が、そして第20回目を記念

## 松阪の知の系譜

本居宣長 小津久足 小津安三郎

① フランス文学者 柏木 隆雄

して(?)初めて妻が参加、フランス人浮世絵収集家について話した。講演を聞いておられた夕刊三重新聞の山本記者から、京都市立芸術大学で長年仏語仏文学を担当してきた妻に、芸大の先生に宇田荻邨(うだ・てきそん)という方があるはずだが、ご存知か?と尋ねられて、

## 松阪の偉人、知っていますか?

私が、その名も作品も知らないのは誠にうかつ千万ながら、案外郷土の偉人について知らないままの人が多いのではないか。例えば宣長の名前は知らない人はいなかろうが、宣長の実像となると、せいぜい「松坂の一夜」

くらいで、それさえ戦前の教科書に載っていたからで、今の子供たちは漠然とした形でしか知らないのではないか。まして長男春庭の仕事やその弟子で江戸時代最大の紀行文作者小津久足(ひさたり)やその膨大な



1940(昭和15)年の京都市立絵画専門学校の卒業写真。前列右から6人目が荻邨

久足(ひさたり)の蔵書を収めた西莊文庫のことなど、あまり詳しくは知られていないような気がする。

### 3氏の側面を分かりやすく

もとより私自身、日本画家の荻邨についてと同様、宣長、久足について専門外で詳しくないのに、誠に僭越(せんえつ)な物言いで恐縮だが、乏しい知識しか持ち合わせていないにせよ、専門外であればこそ、氣楽に、しかしできるだけ私の分かる範囲で正確に、そうした松阪の偉人の側面を知つてもらうことは意義あることではないか。

はかばかしく山本記者の質問に答えるなかつたのを、かえつてよいことに、夕刊三重の読者に宣長、久足、その後裔(こうえい)の映画監督小津安二郎について書いてみるのはどうだろうと厚かましくも提案してみた。2011(平成23)年9月から13(同25)年1月まで1年半ばかり、本紙で「心の中の松阪」を、合わせて66回連載させていただいた。今回も同じ形で話を進めさせていただこうと思つておる。読者諸賢のご愛読を賜れば誠にありがたい。

(毎週土曜掲載)

**【柏木隆雄さん(76)略歴】**  
1944(昭和19)年松阪市殿町に生まれる。松阪工業高校から住友金属工業(株)勤務の後、大阪大学で学ぶ。現在大阪大学 大手前大学名譽教授。元フランス語フランス文學會長。フランス文學專攻。著書に「バルザック詳説」、「翻訳によるバルザック著『暗黙事件』」など。